

「鳩夫妻」について

水 田 圭 子

キャサリン・マンスフィールド(1888—1923)の短篇「鳩夫妻」(“Mr. and Mrs. Dove”, 1921)の構成を明らかにしてみたい。

主人公レジナルド(Reginald)は父親の役も兼ねた母親の一人息子で、外地のローデシアの果樹園を引き継いでいたが、体をこわしてイギリスに休暇で戻っていた。その滞在もいよいよ最後になったある晩夏の雨上がりの午後である。最初の部分で、彼は恋人アン(Anne)に結婚の申込みをしようかどうかと思悩んでいる。「園遊会」においてそうであったように、レジナルドのことを前から知っているかのように、読者を突然に彼の心の中へ連れ込んでしまう。最初の文“Of course he knew……”は、読者の方も無論彼のことは先刻御存知でしょうが、というかのように、読む側と作品との距離を許さない。最初の三節でレジナルドの現在の心境と彼の背景が述べられる。希望的観測はないが、愛する気持には変わりなく、彼女と一緒にローデシアまで行く途中を想像していると、彼はこの夢想はとても申し分ないものと感じ、勇気がでる。運をためてみることに決心して彼女の家へ出かける。家を出ようとする庭にいる母親から呼びとめられる。次の一節で彼の母親が登場する。いつも犬の狎を二匹後ろに従えて庭を散歩している。レジナルドは母親を嫌いではないが、かなり厳しい親であると思っている。しかも母親は彼がかなり大きくなる前に自分自身と父方の両方の親戚とも喧嘩してしまったので、レジナルドは親戚とのつき合いもなく、まさに母と二人きりなのである。以上はこの短篇の導入部分である。

次にこの作品は、二つの庭とそれを結ぶ道へと移る。レジナルドの家の庭とアンの子の家の庭である。この間に一本の道が二つの庭を結ぶようにかか

っている。この二つの庭は並列になっている。彼は母親と二匹の犬を中心としたこの庭から逃げ出し、Anne と二羽の鳩が代表する夢の世界の庭へと行きたがっている。そして、また母なるイギリスを立て、ローデシアへ出かける前日という設定とも重なっている。

母親の家の庭では、母親と彼の関係がわかる。母親は二匹の犬を連れて散歩しながら、枯れた花の頭をぱちんと切っている。その彼女から、「出かけるのではないでしょうね」と言われると弱々しい声で答えたり、ちよきんといはさみの音にびっくりする。母親の言葉を解する二匹の犬も彼女の味方である。枯れた花の頭を切ることで、ユーモラスに死刑執行人のように書かれている。それからわかるように、厳しく彼を支配しようとする様子であり、彼もそれを拒絶するほど強くはない。この庭は、枯れた花や、容赦ないはさみの音、犬の目が磁器のつやにたとえられ、澄んだ猫の目と違った半透明な陰うつさといったものが感じられる。

アンの家へ行く途中の道は、まるで幸運が来るかのように、そして夢の世界への誘いにふさわしく描かれている。雨上がりの後のその道は輝いており、他に通る人もいない。晴れ上がった空には親鳩の後に続く子鳩のように森の上を一列に長々と小さな雲が動いて行く。木々から最後の水滴をちょうど振り落す位の風があった。一つの暖かい星が彼の手にはねかかった。ぴゅー——もう一つの水滴が彼の帽子の上をたたいた。生垣はいばらの匂いがした。たちあおいが家々の庭で何とたけ高く明るく輝いていたことか。雨上がりの後の明るい日差しに輝く植物や道路は彼を勇気づける慰め手であり、美しい彼の道行きの相手である。星の水滴は暖かく、しかもその後すぐに音がつけ加えられている。輝き暖かさ音響の視覚・触覚・聴覚の調和である。星やいばらには楽園的要素があり、また、たちあおい(holly hocks)には、語源的にはholy の意味があるので、彼の理想の夢の新世界へ行く途中にふさわしい描写である。また彼女の家の垣根のばいかうつぎの木の花(syringa bushes)は大変甘い匂いのする花であるから、彼女の家は快適な

楽園のようなところであろう。

またたく間に彼女の家へ着くと、彼女の両親は外出しており、アンと女中だけしか家にはいない。彼が通された部屋で一人で運命が決まるのを待つ気持は歯医者さんのところにいる時の気持に似ていないものでもないと言っている。先に述べた匂いに加えて、彼女の家にいるときの気持をこのように表現した点、マンスフィールドは道行き文とアンの子の描写と同じ一節にまとめ我々の感覚のすべてに訴えかけるように描いているのは見事といえる。彼とアンが向いあっているうちに、彼女は彼と会って以来のクセで、彼を見て吹き出してしまふ。母親の家とは対照的にこちらには笑いがある。二人が話している間に鳩の「ルークークー」という鳴き声が出てくる。この鳩の鳴き声はレジナルドの会話の後に続き、彼の胸の内の愛情の外的表現、抽象物の具体的表現として効果を出している。また突然に静かな中からこのような音がしてきたことの意外性、またその鳴き声が微妙に少しずつ高まるようであり、遂に、アンは彼に、鳩にお別れの挨拶を言いに行きましょうとベランダへ出る。そこで二羽の鳩について知る事実は、読者の意表をついたやゝ皮肉なユーモラスな事実である。二羽のうちの一羽、つまり鳩夫人が、いつも鳩氏の前にいて、鳩夫人がちょっとした叫び声をあげながら前方へかけ出すと、鳩氏は必ずその後真面目に頭を下げ下げしてついて行く。それがまた鳩夫人をおかしがらせる。彼女が急にかけ出すと、鳩氏は真面目に頭を下げ下げしてついて行く。これがアンの説明であるが、この二羽の鳩はアンとレジナルドの二人の姿でもある。レジナルドはアンの説明も上の空で聞いていたが、遂に「アン、ぼくのことを好きになると思いますか？」と聞いたのである。しかしアンの否定的答で彼の期待していた新しい世界は薄らいで行く。彼がどう反応したらよいかわからぬうちに彼女は庭の方へ行ってしまふので、彼も鳩氏のようについて行く。そして、そんな時ですら彼女は笑いを抑えきれず、彼のちょうネクタイは絵本に出てくる猫がつけているちょうネクタイを思い起させ

るといって笑い出す。彼女が彼と結婚できない理由というのは、自分が笑うような人とはどうしても結婚できないということである。しかし一方では彼女はレジナルドには最初から何でも言えたし、彼ほど人を好きになったことはないと言い、どんな人とも一緒にいてこれほど幸福に感じたことはないと自分で認めながら、レジナルドと自分との愛は、人々や本が愛について語る時意味するものとは違うと言い、自分たちは鳩夫妻のようだと言う。レジナルドの方は大変な衝撃を受け、目も喉も現実感覚を失いそうである。レジナルドは、本当に純粋な人物である。彼は鳩のように穏やかで、やさしく、人を傷つけず、争いを嫌う。また、彼女も彼のことを笑いはするが、その理由は、無邪気で悪気がなく、彼から結婚の申込を受けてもまだ現実的に考えられず、本やドラマのロマンティックな物語の方を信じているような所がある。彼女も鳩のように無邪気な愛すべき人である。

二人共これから成長すべき人たちのようである。鳩の象徴する世界は、平和で、また夢の理想の世界であり、*holy spirit* から連想される聖なる俗世を離れた世界である。人はこのような純粋な世界、真の心が通じ合える、楽園の世界を求めてやまないのであり、現実の世界のつらさに比例して、それを求める。レジナルドは、彼女から断われ、立ち去ろうとするが、鳩の鳴き声がきこえ、「レジー」と呼ばれると、また鳩氏のように彼女のところへ戻って行くのである。単に楽観的でもなくまたひどく悲観的でもなく、読者に最後の結末をまかせている。アンとレジナルドの関係を鳩に代表させているのは、「幸福」における梨の木のイメージと同じ手法である。鳩が多くの場合白で代表されるとすれば、このピンク色のバラや、鳩小屋の白い鳩が、幸福の象徴であり、我々が志向する楽園的世界である。

またこの二つの庭とそれを結ぶ道という手法は、この作品より後に同年(1921)の十月に完成した「園遊会」の手法と似ている。「園遊会」での二つの庭は、夢幻的理想の世界と現実の世界を表わし、両者は白い道でつ

ながっている。主人公は前者から後者へ降りて行くことにより二つの世界の調和をはかる。「鳩夫妻」では、やはり主人公は、現実世界の庭から、夢の理想の庭へと、両者を結ぶ道を通して行く。そして主人公の進み方は「園遊会」の場合とちょうど反対である。また「鳩夫妻」では庭は並列的で、「園遊会」は垂直的である。しかし二つの世界とそれをつなぐ道の設定の仕方では両者共通しており、作者マンスフィールドは同じ年にできたこの二つの作品には同じような構想を抱いていたと思われる。また日記には、「鳩夫妻」について作者自身が、少し作り事めいている⁽¹⁾と言っているが、二つの庭とその道の設定はやや明瞭すぎ、そこに文学的潤いの乏しい観念的作品になったきらいがある。しかし数ヶ月後に完成した「園遊会」では論理の骨組は、ぼかされ、たえず美しい雰囲気と、芸術性の高い、内容の複雑な作品へと昇華したといえる。

文学的潤いに乏しいといったが、しかしマンスフィールドのスタイルの個性はこの作品にも充分でている。ある日の午後という限られた時間内に、これまでの経過、背景を素早く述べることによって読者を飽かせることがない。また個々の描写のうち、特に雲や煙は彼女が得意とするところである。湿った青い親指のような透明な煙が煙突の上にかかっており、それは本物のように見えなかった、とあるが、レジナルドの気持ばかりでなく、人が大きなショックを受けた時に見る外の景色が何と非現実的にみえるかということを見ると、雰囲気にあったよい描写である。また彼女は人物、動物、物を適格に表現することが得意であるが、ユーモラスな鳩と共に、母親のお供をする狆の一匹のことを、彼女はとても太って、毛がつやつやしていたので、半ば溶けたタフィ(toffee)のかたまりのようにみえました、など、会話のうまさ、口語体の使用で生き生きした文を作りあげている。

注

(1) *The Journal of Katherine Mansfield* (London: Constable, 1962), p. 256